

## 「髭男爵」山田ルイ53世さん [お笑いタレント]

ご自身のひきこもり体験について、様々なところで発信してきた山田さん。大変だったその経験を決して美談として語らない山田さんのお話は、子どもたちを指導する先生方への励みや気づきをたくさん含んでいます。芸人としてだけでなく、最近は作家としてもご活躍中の山田さんにお話をうかがいました。



### 名門中高一貫校生から一転、 ひきこもりの道へ

成績は良く、ほとんどの科目が「5」。児童会の会長にも選ばれ、サッカーも得意。バレンタインデーにはたくさんのチョコレート。小学校時代のぼくはまさにクラスの「主役」でした。そんなぼくが「中学受験」を決めたのは、6年生の夏。クラスメイトの細野君に、中学受験という世界があると教えてもらったのがきっかけでした。見たこともない問題集を小脇に抱えて塾に通っている細野君が俄然カッコよく見えて、「自分もやりたい、合格したら、さらにカッコいい」と思ったんです。

だけど、お金のかかる大手の塾に通う余裕はなく、通えたのは、生徒がぼくを含めて2人しかいないような、なんとも「しょうもない塾」でした。それでも周囲の予想に反して、名門の中高一貫校に合格。片道2時間近くかけて通学し、授業を受け、放課後は部活のサッカーと、とてもハードな毎日でしたが、成績は大体学年のトップ10内をキープ。部活も1年次からレギュラーでした。そんな輝かしい中学生生活の途中、あることがきっかけでぼくは学校に通えなくなり\*、そこから6年間のひきこもり生活が始まりました。

\*詳細は著書『ヒキコもり漂流記』を参照。

### ひきこもり時代にしていたことは

ひきこもっている間、勉強を放棄していたわけではありません。「やばい、みんな学校行ってるのに！ 何かしないと！」波はありましたが、そんな焦

りが高まると、独りで机に向かっていました。

その頃に読んでいた本の中に、図書館で借りた物理学の専門書がありました。専門書には、分子、原子、電子、素粒子など、物の成り立ちが一から説明してあって、難しいながらもじっくり読んでいくと、「なるほど、こうなっているのか」と、原理がわかる部分が所々ありました。それがすごく気分がよかったです。方程式ひとつとってみても、自分で理屈を理解するところまでたどりつくと、本当の意味で自分の身になります。そこには、暗記がものをいう学校のテストでいい点数を取るのとは、違う快感がありました。

ひきこもりの経験がいいことだとか、ためになったとか、ぼくは全く思いませんが、その期間、自分であれこれ考える勉強ができたことは、よい鍛錬の場となったのかもしれません。

### 娘の学習を見て思うこと

「自分で考える」ということと言えば、「1つの解法パターンだけを教えるのはどうかな」と、娘の学習を見て思います。小学校低学年の娘は、筆算の計算で繰り下がった数字を書かないように教わってきます。でもぼくは、計算間違いするぐらいなら書いたほうが良いと思う。そこで娘にも「繰り下がった数字を書いていないから間違ふんだよ？」と言うんですが、どうも信用できないらしく、耳を貸してくれません(笑)。

娘には基本的に「勉強をやりたくないときは、やらなくていい」と言って

います。誰でも調子の波はある。だから、「自分で自由に考えてやりなさい」と言っているんですが、そうすると、見事にやりませんね(笑)。

子どもに勉強への興味をもたせるのは、本当に難しいです。

### 話す内容より技術で勝負

先生の中には、子どもの興味を引くために、自分の体験談をそのツールにしようとする方もいるでしょう。

ぼくの相方のひぐち君は、学生時代にバックパッカーとして世界(インドとアメリカ)を回ってきたことを、すごく自慢げに人に話します。しかし、そんな人は山ほどいる。ぼくのひきこもりもそうですが、個人的な体験談なんて、実はそれほど大層なものではない。それを「どうだい、自分はキミたちより人生経験があるんだ」という姿勢で披露しているのなら、何ともお粗末なマウンティング。子どもたちも、何かを察して身構えるでしょう。

それでも、ということであれば、先生には、話す技術を磨いてほしい。話す素材そのものでウケようとするだけでなく、いかに偉そうじゃなく、ポロっと出すかというテクニック。

芸人は、話を多少盛ってしゃべることがあります。しかし、この塩梅が難しい。笑いほしさに盛り過ぎると逆効果。それと同じことです。「ユニークな先生」を演じようとし過ぎていないか、気をつけたいところ。

結局、自分のできることをコツコツとやるのが一番なのかもしれません。

### PROFILE

やまだるい 53 せい ● 1975 年生まれ。お笑いコンビ・髭男爵のツッコミ担当。地元の名門・六甲学院中学校に進学するも、ひきこもりとなる。大検合格を経て愛媛大学法文学部に入學、その後中退して上京、芸人の道に。2007 年、「ルネッサランス」の乾杯ネタで大ブレイク。現在、執筆、テレビ、ラジオなど多方面で活躍中。主な著書は『ヒキコもり漂流記 完全版』(角川文庫)、「一発屋芸人の不本意な日常」(朝日新聞出版)など。

自分ができることを誠実に  
自分でたどりつくことに価値がある